

國學院大學學術情報リポジトリ

日本靈異記の罪業と救済の形象

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 千沙子, Otsuka, Chisako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002427

「日本靈異記の罪業と救済の形象」

國學院大學大学院 文学研究科 大塚 千紗子

論文の内容の要旨

大塚千紗子提出論文「日本靈異記の罪業と救済の形象」は、『靈異記』における人間の罪業と救済の構造、救済者たる〈聖人伝〉の形象化について考察し、『靈異記』の文学的意義を論じるものである。人間の罪業を語る説話、罪を救済する聖人の伝承を取り上げ、説話文脈の典拠を仏典の世界に求めながら、古代日本人の欲望における罪業と葛藤が、如何に文学として描かれたのか論じることを目的とする。

本論文は、「序論」(「本論文の目的と方法」、Ⅱ『靈異記』における罪業観と救済の構造、Ⅲ『靈異記』下巻第三十八縁の研究史―二つの夢見と夢解―、Ⅳ、本論文の概要)、「第一部 罪業の形象」(六章)、「第二部〈聖人伝〉の形象」(四章)、「結論」によって構成する。以下、各論の概要を述べる。

第一部「罪業の形象」は、編者の感得した「愛網の業」の問題を通して、人間がいかにな罪業と対峙し、救済を得るのかを検討する。そこでは罪と業の関係性、罪業と救済の形象化を論じる。

第一章「狐妻説話における主題―愛欲の表現と異類婚姻譚―」(はじめに、一、『靈異記』に見る狐妻説話とその主題、二、狐の変化と「姝しき女」への眼差し、三、異類婚姻譚における愛欲、おわりに)

本章は、上巻第二縁の異類婚姻譚の主題の変容と、漢籍における狐の怪異譚を考察する。狐は美女や菩薩に変化して人を誑かすように、狐との恋愛は禁忌として語るべきものであった。さらに他の異類婚姻譚との比較によれば、本縁は狐との愛欲と業の問題を提示することに主眼があると考えられる。本章では、男の求める美女としてまなざされる狐の表現性から、男の愛着による婚姻とそこに生じる業を論じる。

第二縁は狐との婚姻に対し、恋愛描写を以て叙情的に描かれていた。しかし『搜神記』、『太平広記』において狐は美女や丈夫へと変じ、人間の男女を誑かし、仏教を侮蔑する悪しき獣として位置付けられている。その点、『靈異記』の狐妻説話は『古事記』上巻の豊玉毘売との婚姻譚や、中巻崇神記の意富多々泥古出自譚のような、氏族の優位性や正当性を主張する話とは異なるのである。これは獣との婚姻に対する隠れた欲望が顕在化した結果の説話叙述であると考えられる。人間でない者に対する愛欲は、吉祥天女へ愛欲を抱いた優婆塞(中巻第十三縁)も同様である。本来ならば優婆塞の行為は戒律への抵触となるが、吉祥天女への熱心な信仰によって生じた奇縁として賞賛されている。これは、僧侶の愛欲を信仰心の顕れとして展開させているのであるが、そこにはやはり人間の愛欲に対する肯定的な姿勢がうかがえる。上巻第二縁は異類婚であるが故に、夫婦の別離と歌によって物語は閉じる。夫婦は破綻を迎えるものの愛欲への戒めでは語り切れない、相対する恋情がここにはあり、他者への欲望と罪業の問題を抱えていると考えられる。これは『靈異記』編者とされる景戒が、「愛業の網」(下巻第三十八縁)を為したと述べることも含め、仏道修行における戒律と愛欲という問題に関わるものである。

第二章「狐妻説話における恋歌―「窈窕裳欄引逝也」との関係を通して―」（はじめに、一、狐妻説話の変容と歌の意義、二、当該歌の先行研究、三、「窈窕」の表現性、四、散文部「裳欄引逝也」の表現性、五、『万葉集』における類歌、六、「ほのか」と「はるか」おわりに）

第一章で取り上げた異類婚姻譚に見える歌に着目する。夫婦別離の際、狐妻が去る描写は「窈窕裳欄引逝也」と表現され、その姿によって夫の詠歌へと転じる。本章では夫の歌を中心として『万葉集』類歌との比較を行なった。「窈窕裳欄引逝也」という散文脈の叙述によって恋の心が惹起され、夫の歌は、「ほるか」の語によって異界へと赴く妻の姿を見ている。一方で、恋心によって生じた狐との婚姻は愛欲における業として位置づけられる。『靈異記』は異類婚姻譚の定型である婚姻破綻の場面に敢て、恋歌を載せる。「ほるか」の語によって人間と異類との隔絶を示しながらも、夫の詠歌は物語を潤沢なものとして昇華させている。歌は『万葉集』と類歌関係にあることから、狐との悪縁による邪淫譚として排除しきれない、悲恋の物語として語ろうとする志向の結果と考えられる。『万葉集』は題詞や左注によって、歌の背後に付随した伝承を語る方法を取るが、『靈異記』は仏教説話の中に歌を必須としているのである。『靈異記』説話と歌の機能については、記紀歌謡等を参照とした広範囲に渉る説話と歌への考察や、仏典における詠歌の意義等を考察する必要があるのである。ただ当該の上巻第二縁についていえば、散文のみでは成し得なかった夫の慕情と物語の余韻を残すことが出来ている。ここには愛欲の邪淫性と、悲恋物語という説話主題のずれが存するが、夫婦別離の歌を載せることは『万葉集』の類型表現を享受した結果であると論じた。

第三章「「愛心深入」における女の因業」（はじめに、一、「愛心深入」における文脈の問題点、二、『靈異記』の夢見、三、神識にみる人間の心的作用、四、女の「愛心深入」おわりに）

中巻第四十一縁は蛇と娘の異類婚姻譚である。娘の心情は「愛心深入」と表現される。この「愛心」の語と、蛇との婚姻が娘の業に影響を受けた「神識」が原因と捉える説話叙述に注目して、「愛心」と「神識」の意味を仏典や仏教教理を通じて考察した。「神識」とは人間の精神・魂・意識である。経典によれば「愛心深入」という心（識）の状態は、強い「愛心」故に「神識」を改善し得なかったという。善珠の『本願薬師经抄』や『瑜伽論記』、『出曜経』において、仏が衆生の「神識」へ働きかけることに対して、応じることの出来ない者も存在するとある。それら衆生は「罪垢深固」であるために、神識が改善することが困難であるとされていた。このため、説話において神識が改善し得ないのは、娘の「愛心深入」という心的作用によるものであったと考えられる。娘はその愛心ゆえに諸悪を引き起こし、愛執によって二度も蛇と交わるのである。この「愛心」の問題は説話後半部でも共通している。前世における息子への深い愛心により、輪廻を果たして息子と結ばれる母や、一見して普遍的な親子愛についても、父の息子に対する「重愛」が時として奇異な因縁になることを示している。説話内で過剰な執着心や強い想いによる感情を全て「愛」と記していることは、愛という人間本来の感情・衝動・欲求が、様々な悪縁の種であると示しているのであろう。上巻第二縁の異類婚に愛欲に対する自己認識への言及は見られなかったが、中巻第四十一縁は仏教思想を援用し、自己の意識が悪因へと結びつく

ことを、異類婚の姿に形象して語るのである。

第四章 「姪洩なる慈母一子の孝養における救済一」（はじめに、一、問題の所在、二、「天骨姪洩」の意味、三、姪洩の母・悪逆の子、四、孝の思想と『父母恩重経』、五、仏の導きと子の孝、おわりに）

『靈異記』に語られる母親の多くは、律令社会の規範の中で生き、我が子を慈しむ母である。しかし、下巻第十六縁の母親は、「天骨姪洩」なる淫蕩な性質によって育児放棄を行なった母である。だが子は母を恨まず、むしろ「慈母」と呼ぶ。これについて子から親への孝養という視点から考察した。母の姪洩は養老律令に抵触する罪であり、同様に養老律令における懲罰の対象である、中巻第三縁の「悪逆」の息子も死の報いを受ける。しかし両者はその後、肉親からの供養を受ける。悪逆の息子の救済は語られないが、姪洩の母はそこに救済が明示される点に、『靈異記』の孝養の絶対性があるものと思われる。そこで『靈異記』の孝養説話の背景に『父母恩重経』を想定し、経典に見られる母子の恩愛の姿を通して孝養と仏教との迎合を確認した。よって、姪洩なる母の罪に対しても供養によって救済するという姿勢が求められており、『靈異記』の説話もその影響下にあると考える。母を救済するという問題は、東アジア仏教圏において要請された主題であり、儒教思想で重視された孝養のモチーフを取り込んだ説話が本縁であった。その上で『靈異記』は、罪人による罪の意識を契機として、その罪人の罪を許し、救済へと導く問題があると考ええる。

第五章 「盲目説話の感応と形象—古代東アジア圏における信仰と奇瑞—」（はじめに、一、盲目の母、二、盲目治癒説話における願、三、「郷歌」にみる母子の盲目譚、四、『雜宝藏経』に見える盲目説話、五、『靈異記』の宿業の病と感応、おわりに）

本章では下巻第十一縁の盲目の母親が薬師如来の木像への帰依によって治癒を得る説話と、『郷歌』、『雜宝藏経』など東アジア圏を視野に入れた母子の盲目説話を取り上げ、それらに共通する感応の様相とそれを語る手法を論じた。『郷歌』の場合、千手観音への帰依と呪歌によって子の盲目が治る。主題の類似性を抱えつつ、諸仏への感応の方法を異にする。『雜宝藏経』は仏への称名によって治癒を得る。その点『靈異記』は、病者の深い信心の願、それに憐れみを覚えた人間の介在があり、そこから罪を滅するための周囲の働きかけを要している。つまり、これらの救済を語る上で『靈異記』は他者を媒介とした感応の方法を必須とする。『靈異記』の病治癒譚は漢訳仏典の世界における信仰の様相を基盤とし、種々の經典の効能を記しながら、諸仏への至心とそれに心動かされた周囲の人々の援助を媒介させる展開を形成していた。つまるところ『靈異記』は読経や信心による靈験の享受を本願としてはいるが、人間の行為による善行を推奨しているのである。『靈異記』は、懲罰的な説話を多く収載するものの、病治癒説話においては、人間の持つ善なる心を一心に信じる編者の信念ともいうべき語りが看取されるのである。よって、『靈異記』の盲目説話は、東アジア仏教圏の感応譚を享受しつつ、そこに人間の善行を奨励させるための意図をもつ説話であると位置づける。

第六章 「宿業の病と無縁大悲」（はじめに、一、『靈異記』の病と宿業、二、無縁の大悲と無相妙智、三、『靈異記』説話と無縁の大悲、おわりに）

本章では下巻第三十四縁の宿業の病者の説話に見られる「無縁の大悲」の語に注目し、仏典にこの語の意味を求め、『靈異記』編者景戒自伝と共に記される意義を考察した。こ

の説話は、宿業を背負う者とそれを救う仏教者との相互関係が見て取れ、一方的な救済ではない、修行者が病者との関係によって生じる「無縁の大悲」を示している。この「無縁大悲」は下巻第三十八縁の延暦六年の夢に記される。景戒は夢解によって「観音の無縁の大悲」が、観音による分け隔てない慈悲の心であると解する。行者忠仙が巨勢皆女に対して起した無縁の大悲の心は、病者の救済の一助となる慈悲の心である。仏典において病气や身体の不俱は、病者自身の過去の因業に拠るものと説かれている。こうした思想背景を持ちつつ『靈異記』は、単に罪人の罪を滅することではなく、様々な人々との共生によって、それぞれの人間が救済を得ることを目的としたのではないだろうか。『靈異記』は罪を救済へ向かう聖人の形を伝える態度があると考ええる。これは、第二部で取り上げる〈聖人伝〉とも関わる点であり、この志向によって叙述された聖人による救済について論じる。

第二部は罪業を認識する自己との関連から、聖人の姿を希求する心的要因と聖人の伝承の形象化を中心とし、聖人が『靈異記』にていかなる〈聖人伝〉として表現されたのかに考察した。

第一章「聖徳太子の片岡説話一「出遊」に見える〈聖人伝〉の系譜一」（はじめに、一、聖徳太子片岡説話伝承の異相、二、釈迦の出家における遊観・出遊、三、聖徳太子伝承と『梁高僧伝』、おわりに）

上巻第四縁は、聖徳太子が宮から出て「遊観」した際に乞食の病者と交流をする、所謂片岡説話である。『万葉集』巻三・四一五番歌には、題詞に聖徳太子が竹原井に「出遊」する。本章はこれら伝承に記される巡遊行為の意義を求めた。中国撰述經典である『釈迦譜』には釈迦の事績を語る仏伝としての性格を有する。ここでは、出家前の釈迦が東西南北の門から「出遊」（「遊観」）し、老人・病人・死人を見つける。釈迦はそこで人間が生きる上で向き合う苦悩と直面するのである。このような出会いを経験として聖人となる者は、土地を巡ることによって特殊な人物と出逢うことが約束されているのであり、『靈異記』の聖徳太子伝承は釈迦の出家譚を踏まえているのであると考ええる。また『高僧伝』には、高德の僧が巡遊して仏道を求めるといった内容の伝記が記されている。これらから聖徳太子の行為を遊観と表記することは仏教者としての資質を太子に付与する意図があると考ええる。第四縁が仏典や仏教説話が語る聖人の話型を通して形成された、『靈異記』のための聖徳太子（聖人伝）であることを論じる。

第二章「靈異記が語る行基伝一聖人の眼をめぐって一」（はじめに、一、『靈異記』の行基説話と分類、二、聖人が備える天眼とその機能、三、天眼の菩薩・通眼の聖人、おわりに）

『続日本紀』によれば行基は東大寺盧舎那仏造営の勸進を行い、大僧正の位を受位される。行基の事績から付随した靈驗伝承の一形態が、『靈異記』の行基説話である。しかし、『靈異記』は行基の能力である前世の事象を見通す「天眼」（または「明眼」）なる力によって解き明かされる因果や罪を語るように、行基の社会事業よりも彼の靈驗に眼目があるだろう。そこで、印度撰述經典における仏の眼の力、『靈異記』上巻第四縁、聖徳太子の通眼との比較を通じて、聖人の持つ眼の役割について考察し、『靈異記』の行基伝を論じる。『出曜経』には、天眼とは仏の備える能力とされる。また、「明眼」とは、凡人の対

比である有智の人が備える眼であり、悪行や愚痴なる心を見ることができる眼である。それは神通力といった霊的な能力というよりも、悪心と対峙できる智慧の心をもつ人間の眼であった。聖徳太子もこのような「眼」を持つ者として挙げられる。『靈異記』は聖徳太子と彼の転生である聖武天皇、行基を結びつけ、仏法を広めた聖徳太子、東大寺建立事業を為した聖武天皇、東大寺の勧進になった行基の三者が日本を仏国土として形成する土壌を築いた聖人として位置付けている。その中で行基は、天眼によって衆生の罪を曝し、内に潜む罪を露呈し、罪を為した人間の自覚を促す者としての役割を持つ。『靈異記』が行基を特別な僧として重要視することは、個々の説話叙述からも窺えるのであり、『靈異記』は行基を民衆に己の罪を自覚させ、罪における因果を教え諭す伝道師のような聖人として語るのである。

第三章「行基詠歌伝承と鳥の形象」（はじめに、一、行基の詠歌、二、鳥の形象と歌の伝承、三、婆羅門僧正と行基との贈答歌、四、行基の嘆きと歌の意義、おわりに）

中巻第二縁は鳥の邪姪を契機として妻子を捨て、行基に師事した信嚴禪師の出家譚から始まり、登場人物の出家と死によって構成される。本章では行基の歌と『万葉集』東歌との詞章の比較を行なう。『万葉集』の「言のみ」や、「言にしありけり」の語を持つ歌の例をみると、「言のみ」とは相手からの言葉を頼りにしたもの、その言葉が現実には叶わなかった過去を回想して嘆く意を持つ。これらは、逢瀬の言葉が「言のみ」であった過去と、逢瀬への期待を裏切られたことへの批難が込められていた。これにより行基の歌は、信嚴の約束を、愛惜の意を以て批難しているのである。そして、批難の内実は悪鳥である鳥に寄せて歌われており、「鳥の邪姪」の妻鳥の行為と、自分の元から先立った信嚴とを重層させているのである。また、後世の行基と婆羅門僧正の贈答歌を見るに、僧の徳や威光を語るための材料となっている。また『梁高僧伝』卷十三には梵唱における音楽の感動を記すように、僧が梵唄を歌うことの行為には韻律と経文の両者が必要であり、それは僧の徳であることが理解される。『靈異記』にも、読経の美しさを閻羅王に賞賛された在家信徒の女の読経が、妙音にして道俗から愛されたという話や（中巻第十九縁）、次章で取り上げた舍利菩薩の読経が聞く人に哀れみをもたらしたとあるように、韻律に対する意識があったと考えられる。歌と散文の関係性や、仏教者における読経の機能を説く『高僧伝』の説を通し、行基の詠歌自体に僧の徳を示す役割があることを論じた。

第四章「外道なる尼一女人菩薩説話の形成一」（はじめに、一、肉団からの異常出生、二、尼と神人、三、外道なる尼、おわりに）

下巻第十九縁は「肉団」（肉塊）から出生した女子が、舍利菩薩に至る説話である。この説話は、印度撰述經典である『撰集百縁経』や『賢愚経』で肉団から男子が生まれ、阿羅漢となること、新羅王・高句麗王の卵生による始祖伝承といった神話的思考を享受しつつ、日本において肉塊から仏教者が誕生したことを語る。「菩薩」でありながら「外道」と罵られる「尼」の特質を僧伝類から検討しつつ、律令制度下における官僧を取り巻く状況と合せて考察した。經典には男児が多産して阿羅漢となる。一方『靈異記』は女子が一人生まれて菩薩へと転じるように、經典を越える「善類」が「我が聖朝」に存在することを主張している。この女子は尼となり、二人の僧から外道と呼ばれて迫害を受ける。菩薩たる資

質を持つ尼の迫害と、尼を庇護する神人の登場は庇護と庇護者の関係性であることを、『靈異記』内の神人の例、『比丘尼伝』、『梁高僧伝』、『神仙伝』から考察した。その結果、『靈異記』は東アジア仏教における聖人である神人の姿を踏襲していると考えられる。特に『比丘尼伝』には、女が仏道修行をする上での困難の他、神人が尼の聖性を保証する夢見が示されたように、舍利菩薩を庇護する神人もこうした仏法守護者の系譜上に位置する者と考えられる。下巻第十九縁は、東アジア圏の神話や経典に拠りながら、「聖朝」である日本国に女の菩薩が顕現したことを強調して語るものである。本章では異形の尼が「外道」から「舍利菩薩」へと転換されること、そして『靈異記』が女身の「菩薩」の〈聖人伝〉を形成したことが、『靈異記』の語る新進的な〈聖人伝〉であったと論じる。

以上が各論の概要である。本論文は、第一部では恋や愛という他者への欲望から生まれる罪業、宿業の者を救済する問題を取り上げ、第二部では、救う者を語る〈聖人伝〉から、聖人の姿をいかに形象したのかを論じたものである。